

子どものソースモニタリング能力に関する 研究動向と展望

近藤 綾

(2007年10月4日受理)

Young Children's Source Monitoring Ability

Aya Kondo

Abstract. Identifying the sources of memories is an basic ability to provide accurate accounts of events. This article reviews research investigated cognitive factors which affect young children's performance of source monitoring tasks. I first briefly describe a basic theoretical framework for source monitoring and categorization of source monitoring. I then review empirical evidence regarding the factors: the similarity of sources, the identity of the agent, prospective processing, the relation of source monitoring to other cognitive skills, metacognitive understanding, and the stringency of source decisions. Finally I highlight theoretical and applied implications regarding external source monitoring ability and discuss for future research.

Key words: young children, source monitoring, memory development

キーワード：幼児、ソースモニタリング、記憶の発達

ソースモニタリングとは、ある情報の起源を想起する際の認知過程である (Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993)。すなわち、自分が知っている知識をどのようにして獲得したのかについて認識することである。欧米においては、ソースモニタリング能力が、目撃証言研究や虐待の報告等に関わる能力であることから近年注目を集め、現実場面で利用可能な指標として用いるための研究が盛んに行われている。一方、日本においては、成人を対象とした検討はいくつかみられるが (e.g., 杉森・楠見, 2005)、子どもを対象とした検討はほんのわずかしがなく、この能力の意味するところはほとんど明かされていない。

日本においても虐待等の子どもが巻きこまれる事件の件数は年々増加傾向を示しており、また子どもが事件を目撃しその内容について証言を求められる場面もいくつか報告されている (仲・上宮, 2005)。従って、欧米と同様に日本でも子どもにどの程度のソースモニタリング能力が備わっているのかを明らかにするための検討が必要ではないだろうか。

以上のことから、本稿では子どもを対象とした欧米のソースモニタリング研究に焦点をあて、以下の順に考察していくことを目的とする。すなわち、①ソースモニタリングの分類と研究の枠組み、②子どものソースモニタリング能力の発達に規定する要因、③外部情報のソースモニタリング研究、④ソースモニタリング課題の問題点と今後の展望、である。

1. ソースモニタリングの分類と研究の枠組み

Johnson et al. (1993) は、ソースモニタリングを3種類に分類し研究の枠組みを提唱している。Table 1 は、分類について簡単な具体例を示したものである。Johnson et al. (1993) は、対象となる記憶が内的に得られたものか (頭でのイメージや考えの記憶) 外的に得られたものか (現実場面で生じた、知覚した記憶) と、行動主体が自分か他者か、といった2つの視点からソースモニタリングをリアリティモニタリング、内

部情報のソースモニタリング、外部情報のソースモニタリングに分類した。

また Roberts (2002) は、より現実場面に即した観点から、ソースモニタリングについて次の2種類のものあげている。一つ目は、2つの出来事の情報源を区別すること、つまりターゲットとなる出来事と、その前と後で提示されるターゲットの出来事に関連した出来事との区別である。これは例えば、テレビやビデオで見た情報と現実の出来事との区別 (e.g., Roberts & Blades, 2000) や、実際の出来事とその後聞いた情報の区別 (e.g., Roberts & Blades, 1998) である。そして、二つ目は、同一の出来事内での特定のターゲット情報を情報源として判断すること、つまり1つのある出来事において2人のうちどちらが言った内容か等の区別 (e.g., Lindsay, Johnson, & Kwon, 1991) である。

ソースモニタリング能力について検討する一般的な研究方法は次のようなものである。まず、参加者に単語や文章等の中心となる情報を時間・空間・情報の発信者 (AさんとBさん等)、情報のモダリティ (視覚と聴覚等) などを変数とした条件を設けて学習してもらう。その後、参加者に未学習情報と学習した情報とを混ぜたリストを提示し、それぞれの情報の情報源について選択形式で判断してもらうというものである。子どもを対象とした多くの研究では、まず再認テストで対象となる刺激が学習したものであったかどうかを判断し、その後ソースモニタリングテストでの判断を行う方法を用いた検討が主流となっている。

Johnson et al. (1993), Johnson (1997) は、以上のようなソースモニタリング課題で情報源を判断する

さいの情報源についての記憶 (認識) は、単純に記憶の痕跡から情報を引き出すのではなく、複雑な帰属過程の結果得られるものであると説明している。つまり、人は情報を想起するさいに行う判断過程を通して、特定の情報源を限定していくということである。言い換えれば、情報源は出来事の符号化というよりも想起するさいに推論されて導かれるのである。しかし、このようなソースモニタリング研究で論じられている考え方には、発達のメカニズムのアウトラインについて明確なものは記されておらず、現在のところ記憶スキルの発達や方略の使用がソースモニタリングの発達に必要な要因と考えられている。

2. 子どものソースモニタリング能力の発達に規定する要因

ソースモニタリング能力は、全か無かで構成されているわけではなく、段階的に発達していく (Johnson et al., 1993)。また、成人と子どものソースモニタリングプロセスは基本的には似ているが (Foley, Durso, Wilder, & Friedman, 1991), 成人と比較して子どものソースモニタリングスキルは十分に発達していないことから、子どもはソースモニタリング判断が難しい (e.g., Roberts & Blades, 1995)。従って以下に、子どものソースモニタリング能力の発達を規定する主な要因について、Roberts (2002) を参考に概観し、虐待等の現実場面に起こりうる現象と照らし合わせながら論じていくこととする。

2.1 類似性の影響

従来の研究によれば、類似した出来事の記憶は、類似していない出来事の記憶に比べて判断が難しいことが報告されている (Johnson et al., 1993; Lindsay et al., 1991)。例えば、Foley, Johnson, & Raye (1983) は6・9歳児と成人を対象にいくつかのソースモニタリング能力を検討し、6・9歳児は2人の人が単語を言う場合の判断よりも、自分と他者の判断を行う場合の判断のほうが困難であることや、6歳児は、自分が言った単語とイメージした単語との判断を行うことが困難であることを明らかにしている。また、男性と女性のどちらの人が言った単語かを判断する場合よりも、2人の女性のどちらが言った単語かを判断する場合のほうが難しいこと (Lindsay et al., 1991), 2人の人が類似した行為を行った場合の判断のほうが、類似していない行為を判断する場合よりも混乱を招くこと (e.g., Foley & Ranter, 1998b; Day, Howie, & Markham, 1998; Roberts & Blades, 1999), 知覚的に似ていない

Table 1 ソースモニタリングの分類 (Roberts, 2000を一部変更)

リアリティ モニタリング	External (他者の観察可能な行為) VS. Internal (自分の観察不可能な行為)	姉は実際に旅行に行ったのか それとも 私が姉が行ったと思ったのか
	External (他者の観察可能な行為) VS. Internal (自分の観察可能な行為)	彼がテレビをつけたのか それとも 私がテレビをつけたのか
内部情報の ソース モニタリング	Internal (自分の観察可能な行為) VS. Internal (自分の観察不可能な行為)	私が実際に火を消したのか それとも 消そうと思っただけなのか
	Internal (自分の観察可能な行為) VS. Internal (自分の観察不可能な行為)	私が父に電話したのか それとも 私が母に電話したのか
外部情報の ソース モニタリング	Internal (自分の観察可能な行為) VS. Internal (自分の観察不可能な行為)	私がアンが勝つと夢見たのか それとも ジョンが勝つと夢見たのか
	External (他者の観察可能な行為) VS. External (他者の観察可能な行為)	ソニーが歌っているのか それとも トムが歌っているのか

行為を判断する場合よりも、知覚的に似ている行為を判断するほうがより混乱すること (Foley, Harris, & Hermann, 1994)。等と類似性に関する多くの検討が行われている。

類似性の影響に関しては、異なる情報源から類似した情報が提示されると、情報源判断を行う検索時にアクセスできる情報の区別がわずかしかないことから、類似していない情報よりも混乱を招き (Roberts, 2002)、その混乱は年齢が低いほど多く生じると考えられている (Lindsay et al., 1991)。

一方、情報源の特徴が類似しているときであっても、自分がどのように感じたか等といった感情への焦点化を伴うと、焦点化して記憶された情報は、判断するさいの検索手がかりとなり、正確な判断を促すという報告もある (Foley, Aman, & Gutch, 1987)。他にも Markham, Howie, & Hlavacek (1999) は、情報のモダリティ (聴覚刺激対視覚刺激) を情報源として提示した検討を行い、視覚情報と聴覚情報を判断する課題は他の提示刺激に比べて類似の影響が少ないことを報告している。しかしこれらの報告では、幼児期は以上のような検索時の手がかりの利用が困難なために判断できないことが示唆されており、類似の影響については、例えば4歳児は異性の区別はできるが同性の区別はできない等の発達の段階があると考えられている。

日常生活の中で生じる虐待等は、特定の人物が類似したさまざまな状況下で行為を行うため、幼児は類似した場面で繰り返される行為についての判断を求められることになる。従って、幼児が類似性の影響をどの程度受けているのかについて検討することは重要である。しかし、類似性がソースモニタリングに影響することは確かだが、これまでの検討は発達の相違について明確にしたものではない (Roberts, 2002)。また類似性については意味が広義すぎるため、まずは従来の類似性研究を分類することが必要であろう。

2.2 行為の主体性

行為者を特定するさいには、自己、友人、知らない人等の行為者のレベルが情報源判断に影響すると報告されている (e.g., Foley & Johnson, 1985; Foley et al., 1983; Foley & Ranter, 1998b)。情報源判断において自己と他者を区別する課題では、自己の判断のほうが優れていることが多くの研究から明らかにされている (e.g., Baker-Ward, Hess, & Flannegan, 1990; Foley & Johnson, 1985; Foley et al., 1983; Roberts & Blades, 1998)。例えば、6-9歳児は、自分が言った単語のほうが、他者が言った単語よりも正確に情報源判断を行えたことが報告されている (Foley et al., 1983)。ま

た自分が行う行為と他者が行う行為を見た場合の情報源判断においては、自分が行った行為のほうが、他者が行った行為よりも正確に判断できたことが示唆されている (Foley & Johnson, 1985)。これらのことについて Foley らは、行為者を特定する情報源判断には、自己生成効果 (Generation effect) すなわち、他者が用意した記憶情報よりも情報を自分自身で生成するほうが正確に記憶できるという記憶現象が関係していると論じている。

また Baker-Ward et al. (1990) は、よく知らない人とよく知っている人を区別するといった行為者を特定する情報源判断において、子どもはよく知っている人の判断の方が正確に行えることを示唆している。そしてこのことは、知っている人の判断は知らない人の判断よりも、自己と関連づけやすく情報を精緻化 (先在する知識を利用して記憶する情報を付加することで記憶を促す) しやすいからであると述べている。

しかし、6歳以下の幼児は、自己と他者を情報源として特定する課題において、自己を判断するほうが情報源の混乱を招くことが報告されており (Roberts & Blades, 1998)、これは自己生成が生じないために正確な情報源判断を行えないことを意味すると同時に、自己生成は児童期に発達することを意味すると考えられている (Foley & Johnson, 1985)。虐待等の犯罪現場においては、行為者をよく知っている場合が多い。従って、自己と親しい人 (例 親・友人・親戚・先生等) との判断においての幼児の能力を明らかにしていく必要があるだろう。また、年齢の低い幼児においての行為者の影響について検討することも今後は必要となってくるであろう。

2.3 予測プロセス

“予測プロセス”とは、情報源を判断するさいの認知活動の一つであり、主に行為の記憶に関係し、どのようにして行為を行ったかの予測、行為の結果の予測、行為の計画、先在する行為と関係する記憶を再現させること (認知的努力) 等を行い (Ranter, Foley, & Gimpert, 2000)、後に情報源を区別するさいの手がかりとして利用される (Foley et al., 1991)。従って、先に述べた自己生成に加えて、正確な情報源判断を行うためには、自己の行為についての認知的努力も必要であると考えられている (e.g., Johnson, Raye, Foley, & Foley, 1981)。

けれども、認知活動が情報源判断の妨げとなる状況もいくつか報告されている。例えば、Foley & Ranter (1998b) は、6歳児にいくつかの行為を自分が実際に行ったのかイメージしただけなのかについて判断さ

せた。予測プロセスは行為のイメージを伴うことから、これを操作するために、半数の幼児には行為をどのように感じたかを考えるよう教示し（感覚条件）、残りの幼児には行為がどのように見えるか（視覚条件）を考えさせた。その結果、感覚条件の方が視覚条件と比較してエラーが生じた。これは視覚条件では他者の視点に基づいて予測したため混乱が生じにくかったが、感覚条件では自己の視点に基づいて予測したために混乱し、認知活動が判断の手がかりとならなかったと考えられる。このように認知活動はイメージを伴う情報源判断を行うさいの検索手がかりに影響するのである。

また6歳以下の幼児は、他者と協力して一緒に何かを作る等の活動において、自分が行ったと誤って主張してしまうことが報告されている（Foley, Ranter, & Passalacqua, 1993）。これは、自分と他者の行為を予測するさいに、協力して行った他者の活動も自分と重ねて符号化してしまうことで判断の検索を誤る“I did it. (私がした)”バイアスが生じ、エラーが増加すると説明されている（Foley & Ranter, 1998）。このように、予測プロセスの過程で判断の検索を誤りエラーが生じる場合があることが報告されているが、虐待等の場面では触れらる、脱がされる等の相互作用が生じる。従って、認知活動についての検討もソースモニタリング発達の理解につながると考えられる。

2.4 情報源の誤りと内容の記憶、スクリプトの関係

先に述べた他者と協力して行う活動で生じる“I did it.”バイアスについては、活動の内容に関する記憶能力の発達によって判断エラーが生じると考えることができる（Ranter, Foley, & Gimpert, 2000）。この主張は、二人で活動を行う協力条件と一人で活動を行う非協力条件を設けた研究から説明できる（Ranter et al., 2000）。すなわち、5歳児の協力条件では非協力条件よりも情報源判断において“I did it.”バイアスが見られ、多くの情報源のエラーが生じた。しかしこの場合の、内容の記憶は優れていたのである。このことから、ソースモニタリングエラーを多くする幼児は、行動の内容を優先して記憶していると考えられており、幼児期などの密度の濃い学習時期は、正確な情報源判断を可能にする符号化や検索プロセスに能力を分散するよりも、情報の内容を抽出することに資源を費やしていると考えられている（Roberts, 2000; Roberts & Blades, 2000）。

またいくつかの研究から、実際の出来事と教示されただけの出来事の情報源判断を導くための認知プロセスにおいては、よく知っている詳細に関連する教示を尋ねられる等といった簡単な認知プロセスを経て判断

を行うほうが、知らないことに関する教示等といった努力を要するプロセスを経て判断するよりも、判断を誤ることが示唆されている（Finke, Johnson, & Shyi, 1988; Foley et al., 1991）。これは、子どもがよく知っている詳細についての教示を与えられると、先在する記憶の復元や鮮明なイメージ行動を容易に引き起こし、教示された情報を精緻化したり、概念ネットワークへ組み込んでしまい、教示された発言ではなく、実際に経験した出来事であると誤った判断を導くためである。つまり、簡単なプロセスを経て判断を導く場合には、経験した出来事に違いないと誤って判断してしまうと考えられるのである（Roberts, 2002）。この説明は、なぜスクリプト（ある特定の状況で行われるであろう一連の行動についての知識）の一致や信頼できる教示が、スクリプトの不一致の場合よりも容易に受け入れられるのかについての説明でもある（Pezdek, Finger, & Hodge, 1997）。おそらく、スクリプトの一致する教示は、詳細を自動的に関連ネットワークに適応することを容易にしてしまうのであろう。

従ってソースモニタリングエラーは、未発達な記憶システムから生成されると考えられているが、以上のように他の認知的スキルの発達によってエラーが生じると考えることもできる。また、幼児のエラーは、必ずしも不正確な報告の生成を促進するわけではなく、記憶・ソースモニタリング・他の認知機能の発達がまだ区別できていないと考えることもできるのである。

2.5 メタ認知の理解

幼児は情報源判断に必要な知識がないために、正確な判断が行えないという報告もある。例えば子どもにこれまで知らなかった情報を教え、その情報をどこで学んだのかについて尋ねると、5歳児以下の幼児は、前から知っていたと報告する（Taylor, Esbensen, & Bennett, 1994; Naito, 2003）。これはつまり、学習した内容に関する情報だけが顕著に残り、情報を学習した時間は同一視されてしまうことを示す。従って、幼児は情報源へのアクセスが必要であると知識として理解していない、あるいはこの知識を適用することに失敗してしまうと考えられている（Taylor et al., 1994）。

また、正確な情報源判断を行うためには、知識と情報源との関係だけでなく、情報源の信用性についての理解も必要である。いくつかの研究から幼児は、自分が直接経験した確かな情報よりも、成人が教えた教示を報告することや、直接経験したことに関係なく情報量が多いか少ないかで判断を行っていることが報告されている（Robinson, 2000; Whitcombe & Robinson, 2000）。これらの報告は主に被暗示性研究（質問者の

発言によって幼児の判断が誘導されてしまうこと)で明らかにされたものであり、自分の知識の理解はソースモニタリングの発達に欠くことができないものであると考えられている (Welch-Ross, 2000)。

さらに、心的状態の推論モデルからは、特に被暗示性に関するソースモニタリング能力の発達は、表象の葛藤の理解と関係するといわれている (Welch-Ross, 2000)。心的表象の葛藤は、例えば、見かけは岩で触るとスポンジの感触のものというような、二方向からの表象が可能な場合に生じる。そしてこの理解は5歳児ころから可能で、3歳児は一方からしか表象できないことが報告されている (Flavell, Flavell, & Green, 1983)。このような心的表象の葛藤は、ソースモニタリング課題で提示される2つの情報源間において生じる (Welch-Ross, 2000)。つまり、まず幼児に物語を聞かせ、その後に物語に関する誤った情報を提示するといった場合である。このような場合、心的表象の葛藤を理解している幼児は、わずかしが誤情報の影響を受けないのに対し、心的表象の葛藤が生じない幼児は、次に出来事が生じると (誤った情報の提示)、一方からしか表象できないために、これまでの記憶 (物語) を単にアップデートしてしまい、結果として誤情報を報告するといわれている。従って、心的表象の葛藤について理解することもソースモニタリング能力の発達に必要と考えられるであろう。

2.6 正確な情報源決定

ソースモニタリングは、自動的あるいは計画的な活動の2つのプロセスが同時に使用されることによって引き起こされる (Johnson et al., 1993)。また、判断エラーは計画的に用いられるソースモニタリングプロセスから注意をそらすと増加し、さらに情報源決定プロセスにおいて厳密な要求を多く求められると生じると考えられている。子どもの情報源決定プロセスについては、主に2つの視点から検討が行われている。すなわち、情報の“植えつけ”によってエラーを減らすことと、“質問方法”によってエラーを減らすことである。

ソースモニタリングエラーについて説明している Fuzzy-trace 理論からは、記憶の強化が正確な情報源決定を行うと考えられている。Paker (1995) は、課題を提示した直後にインタビューした幼児の方が、しなかった幼児と比較して、2週間後のテスト成績が良かったことを報告しており、強化された記憶 (植えつけ) はソースモニタリングに影響することを論じている。また、記憶の強化が経験した出来事の情報源に明確に焦点化することを可能とし、エラーを減らすこ

とも報告されている (Leichtman, Morse, Dixon, & Spiegel, 2000)。さらに Thierry, Spence, & Memon (2001) は、出来事と内容の記憶のリハーサルの影響について検討し、同様の結果を報告している。しかし、3-4歳児においては“植えつけ”によるエラーの減少は見られておらず、出来事の正確な報告を促すための支援や、他の方略についての検討が必要であると論じられている。

またエラーを減らす“質問方法”についての検討も行われており (e.g., Poole & Lindsay, 2001; Leichtman & Ceci, 1995)、ソースモニタリング判断で使用されている選択質問の方法は、自由再生等の報告と比較してエラーを減らすことが可能であるとされている。このことから6歳児以降になると、正確な情報源決定プロセスを感覚的に示すことができるようになり、年齢とともに発達していくと考えられている。けれども、この質問方法は、植え付けと同様に4歳児以下の幼児に有効とはいいがたく、エラーを減らすためのさらなる質問の工夫が必要である。またこの2つの視点は虐待等の事情聴取場面に関係する能力であるにも関わらず、あまり多くの検討はなされていない。従って今後の検討が期待されている。

3. 外部情報のソースモニタリング研究

ソースモニタリング発達に規定する要因について概観すると、実に複雑に要因が絡まっていることは伺えるが、どの年齢においてどの要因が最も関係するのか等といった明確なものではない。また、要因として取り上げた研究のほとんどは、Johnson et al. (1993) が分類した3つのソースモニタリングのうち、リアリティモニタリング (e.g., Foley & Ranter, 1998; Markham et al., 1999) と内部情報のソースモニタリング (e.g., Foley & Johnson, 1985; Parker, 1995) に属し、特に3-5歳児はソースモニタリング判断ができないことが報告されている。しかしソースモニタリング能力は段階的に発達することから (Johnson et al., 1993)、年齢の低い幼児においても判断が可能な場合はあると考えることができる。言い換えると、年齢の低い幼児がどの程度なら判断を行えるのかを知ることが必要ではないだろうか。そして、このような視点からソースモニタリングの発達を捉えることで、複雑に絡まった要因が年齢に応じて段階的に明らかとなる可能性が考えられる。従って、ここでは比較的簡単な判断といわれている外部情報のソースモニタリングに焦点を当て、概要を論じることとする。

外部情報のソースモニタリング研究は研究例が少な

い。この理由としては、他のソースモニタリングよりも、比較的容易に判断が行えることが示唆された (e.g., Foley et al., 1983) ことで、それ以上の検討がなされなかったと推察できる。しかし、年齢の低い幼児の判断が可能ということは、年齢の低い幼児の判断能力について知る上で有効な課題と考えられるのではないだろうか。

幼児を対象とした外部情報のソースモニタリング研究を Roberts (2002) の分類に従ってさらに細かく分けると、ほとんどの検討は2つの出来事間に関する研究 (e.g., Ruffman, Rustin, Garnham, & Parkin, 2001; Bright-Paul, Jarrold, & Wright, 2005; Roberts & Blades, 1999, 2000; Bruck, Melnyk, & Ceci, 2000; Leichtman & Ceci, 1995) である。またこれらの研究は、近年注目されている子どもの目撃証言の信用性や、虐待の報告と深く関連することから、被暗示性研究や虚偽記憶研究において、現実場面を考慮した応用的な検討が多くなされている。そして多くの結果から、幼児は成人や児童よりもソースモニタリング能力が未発達であるため、情報源判断のさいにより混乱が生じ、判断が難しいということが示唆されている (e.g., Ruffman et al., 2001)。

一方、同一の出来事内におけるソースモニタリング研究は少なく、基礎的検討しか行われていない (Foley et al., 1983; Lindsay et al., 1991; Drummey & Newcombe, 2002; Kovacs & Newcombe, 2006)。しかし、年齢の低い幼児であっても判断が可能であることは示唆されている。例えば、4歳児も6歳児と同様にAの人とBの人のどちらが言ったことであったかを区別できること (Lindsay et al., 1991; Drummey & Newcombe, 2002) や、5歳児は、2人の人が言った情報を区別する課題において天井効果を示したこと (Kovacs & Newcombe, 2006) が報告されている。

これに対して同一の出来事内における外部情報のソースモニタリングを応用的に検討した課題では、情報源判断が難しくなることも報告されている。唯一現実場面に即した同一の出来事内のソースモニタリングを検討した Sugimura (2007) は、5-6歳児と成人を対象に3人の女性が異なるマジックを披露するというマジックショーを観せ、一ヶ月後にどの女性が行ったマジックであったかについての情報源判断を行った。その結果、5-6歳児は、成人と比較して判断成績が悪かった。これはつまり、基礎的検討において簡単であったと報告されている幼児の同一の出来事内のソースモニタリング判断も応用的な課題になれば判断が難しくなることを意味すると考えられる。

従って今後はまず、同一出来事における外部情報の

ソースモニタリング研究においても応用的検討が必要であろう。同時に、外部情報のソースモニタリング課題を使用した年齢の低い幼児の判断能力をサポートするための検討も必要ではないだろうか。例えば、Brigit-Paul et al. (2005) は、幼児に対する情報源質問時には、実験者の質問に加えて、情報源となる選択項目の視覚的情報を提示することの有用性を示唆している。このように従来の課題に何か補足して判断を行わせるような新たな検討を行うことで、より年齢の低い幼児の判断能力の程度を知り、そこに最も規定する要因を探ることができるのではないだろうか。さらにこのことは、各年齢に応じた子どものソースモニタリングの発達をより明確にすることへとつながるかもしれない。そして、このような幼児期のソースモニタリングの発達のメカニズムが明らかとなれば、現実問題へのさらなる貢献となるであろう。

4. ソースモニタリング課題の問題点と今後の展望

最後に、ソースモニタリング課題の問題点について簡単に触れておく。ソースモニタリング課題は、実験デザインが容易で、ソース条件を変化させることによって難易度を自在に変化させられるため、記憶能力の違いをより敏感に察知できるといった長所がある (金城, 2001)。しかし、課題によって得られたデータの分析方法は統一されておらず、結果が単純に比較できないという大きな問題点がある。また、課題の手続きについての検討もいくつか行われている (e.g., Multhaup, 1995; Marsh & Hicks, 1998)。例えば、Marsh & Hicks (1998) は、従来のようにテスト時に3つの選択肢で判断を求める課題 (A・B・なかった) ではなく、二者択一で判断を行うソースモニタリング課題を提案している。

Lindsay & Johnson (2000) は、ソースモニタリングの枠組みは今後の発展を促す1つの指標としての提案であり、現実場面を想定した複雑な状況下におけるさらなる検討が必要であると論じている。従って、今後は課題の手続きや分析方法についての検討も求められるであろう。そして、より明確な“ソースモニタリング理論”を提唱することが必要となるであろう。

【引用文献】

- Baker-Ward, L., Hess, T. M., & Flannagan, D. A. (1990). The effects of involvement on children's memory for events. *Cognitive Development*, 5, 55-69.

- Bright-Paul, A., Jarrold, C., & Wright, D. B. (2005). Age-appropriate cues facilitate source-monitoring and reduce suggestibility in 3 - to 7 - year - olds. *Cognitive Development, 20*, 1-18.
- Bruck, M., Melnyk, L., & Ceci, S. J. (2000). Draw it again Sam: The effect of drawing on children's suggestibility and source monitoring ability. *Journal of Experimental Child Psychology, 77*, 169-196.
- Day, K., Howie, P., & Markham, R. (1998). The role of similarity in developmental differences in source monitoring. *British Journal of Developmental Psychology, 16*, 219-232.
- Drummey, A. B., & Newcombe, N. S. (2002). Developmental changes in source memory. *Developmental Science, 5*(4), 502-513.
- Finke, R. A., Johnson, M. K., & Shyi, G. C. W. (1988). Memory confusions for real and imagined completions of symmetrical visual patterns. *Memory & Cognition, 16*, 133-137.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1983). Development of the appearance-reality distinction. *Cognitive Psychology, 15*, 95-120.
- Foley, M. A., Aman, C., & Gutch, D. (1987). Discriminating between action memories: Children's use of kinesthetic cues and visible consequences. *Journal of Experimental Child Psychology, 44*, 335-347.
- Foley, M. A., Durso, F. T., Wilder, A., & Friedman, R. (1991). Developmental comparisons of explicit versus implicit imagery and reality monitoring. *Journal of Experimental Child Psychology, 51*, 1-13.
- Foley, M. A., Harris, J. F., & Hermann, S. (1994). Developmental comparisons of the ability to discriminate between memories of symbolic play enactments. *Developmental Psychology, 30*, 206-217.
- Foley, M. A., Johnson, M. K., & Raye, C. L. (1983). Age-related changes in confusion between memories for thoughts and memories for speech. *Child Development, 54*, 51-60.
- Foley, M. A., & Johnson, M. K. (1985). Confusions between memories for the performed and imagine actions: A developmental comparison. *Child Development, 56*, 1145-1155.
- Foley, M. A., & Ranter, H. H. (1998b). Distinguishing between memories for thoughts and deeds: The role of prospective processing in children's source monitoring. *British Journal of Developmental Psychology, 16*, 465-484.
- Foley, M. A., Ranter, H. H., & Passalacqua, C. (1993). Appropriating the actions of another: Implications for children's memory and learning. *Cognitive Development, 13*, 91-108.
- Johnson, M. K. (1997). Identifying the origin of mental experience. In M. S. Myslobodsky (Ed.), *The mythomanias: The nature of deception and self-deception* (pp.133-180). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. (1993). Source monitoring. *Psychological Bulletin, 114*(1), 3-28.
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Foley, H. J., & Foley, M. A. (1981). Cognitive operations and decision bias in reality monitoring. *American Journal of Psychology, 94*, 37-64.
- 金城 光. (2001). ソース・モニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望. *心理学研究, 72*(2), 134-150.
- Kovacs, S. L., & Newcombe, N. S. (2006). Developments in source monitoring: The role of thinking of others. *Journal of Experimental Child Psychology, 93*, 25-44.
- Leichtman, M. D., & Ceci, S. J. (1995). The effect of stereotypes and suggestions on preschooler's reports. *Developmental Psychology, 31*, 568-578.
- Leichtman, M. D., Morse, M. B., Dixon, A., & Spiegel, R. (2000). Source monitoring and suggestibility: An individual differences approach. In K. P. Roberts & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.257-288). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Lindsay, D. S., & Johnson, M. K. (2000). False memories and the source monitoring framework reply to Reyna and Lloyd (1997). *Learning and Individual Differences, 12*, 145-161.
- Lindsay, D. S., & Johnson, M. K., & Kwon, P. (1991). Developmental changes in memory source monitoring. *Journal of Experimental Child Psychology, 52*, 297-318.
- Markham, R., Howie, P., & Hlavacek, S. (1999). Reality monitoring in auditory and visual modalities: Developmental trends and effects of cross-modal imagery. *Journal of Developmental Child Psychology, 72*, 51-70.
- Marsh, R. L., & Hicks, J. L. (1998). Test formats change source-monitoring decision processes. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 24*(5), 1137-1151.

- Multhaup, K. S. (1995). Aging, Source, and decision criteria: When false fame errors do and do not occur. *Psychology and Aging*, *10*, 492-497.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autoegetic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology*, *85*, 312-336.
- 仲 真紀子・上宮 愛 (2005). 子どもの証言能力と証言を支える要因. *Japanese Psychological Review*, *48(3)*, 343-361.
- Perker, J. F. (1995). Age differences in source monitoring of performed and imagined actions on immediate and delayed tests. *Journal of Experimental Child Psychology*, *60*, 84-101.
- Pezdek, K., Finger, K., & Hodge, D. (1997). Planting false childhood memories: The role of event plausibility. *Psychological Science*, *8*, 437-441.
- Poole, D. A., & Lindsay, D. S. (2001). Children's eyewitness reports after exposure to misinformation from parents. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, *7*, 27-50.
- Ranter, H. H., & Foley, M. A., & Gimpert, N. (2000). Person perspective on children's memory and learning: What do source-monitoring failures reveal. In K. P. Roberts & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.85-114). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Roberts, K. P. (2000). An overview of theory and research on children's source monitoring. In K. Roberts & M. Blades (Eds.), *Children's Source Monitoring* (pp.11-57). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Roberts, K. P. (2002). Children's ability to distinguish between memories from multiple sources: Implications for the quality and accuracy of eyewitness statements. *Developmental Review*, *22*, 403-435.
- Roberts, K. P., & Blades, M. (1995). Children's discriminations of memories for actual and pretend actions in a hiding task. *British Journal of Developmental Psychology*, *13*, 321-334.
- Roberts, K. P. & Blades, M. (1998). The effects of interacting with events on children's eyewitness memory and source monitoring. *Applied Cognitive Psychology*, *12*, 489-503.
- Roberts, K. P., & Blades, M. (1999). Children's memory and source monitoring of real-life and televised events. *Journal of Applied Developmental Psychology*, *20*, 575-596.
- Roberts, K. P., & Blades, M. (2000). Discriminating between memories of television and real life. In K. P. Roberts, & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.147-169). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Robinson, E. J. (2000). Belief and disbelief: Children's assessments of the reliability of sources of knowledge about the world. In K. P. Roberts & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.59-84). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Ruffman, T., Rustin, C., Garnham, W., & Parkin, A. J. (2001). Source monitoring and false memories in children: Relation to certainty and executive functioning. *Journal of Experimental Child Psychology*, *80*, 95-111.
- Sugimura, T. (2007). External source monitoring in real-life event: Developmental changes in ability to identify source. *Applied Cognitive Psychology* (in press).
- 杉森絵里子・楠見孝 (2005). ソースモニタリングエラーにおける質判断と時間判断の検討—時間経過が反応バイアスに及ぼす影響—. *認知心理学研究*, *2*, 35-45.
- Taylor, M., Esbensen, B. M., & Bennett, R. T. (1994). Children's understanding of knowledge acquisition: The tendency for children to report that they have always known what they have just learned. *Child Development*, *65*, 1581-1640.
- Thierry, K. L., Spence, M. J., & Memon, A. (2001). Before misinformation is encountered: Source monitoring decreases child witness suggestibility. *Journal of Cognition and Development*, *2*, 1-26.
- Welch-Ross, M. K. (2000). A mental-state reasoning model of suggestibility and memory source-monitoring. In K. P. Roberts & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.227-256). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Whitcombe, E. L., & Robinson, E. J. (2000). Children's decisions about what to believe and their ability to report the source of the belief. *Cognitive Development*, *15*, 329-346.

【謝 辞】

本稿の作成にあたり有益なご助言をいただきました福岡教育大学 杉村智子先生に深く感謝いたします。

(主任指導教員 杉村伸一郎)